

多様な考えを尊重した 学び合いが子どもたちの思考を促す

先生方から「学び合いが十分に深まらない」という声が聞かれる。

そもそも学び合いとはどのような学習活動を指すのか。そして、思考力、判断力、表現力等を育む上での学び合いの意義とは何か。中央教育審議会委員を務める文教大大学院の嶋野道弘教授と、

嶋野先生の指導の下で校内研究を進める静岡県掛川市立城北小学校の鈴木功一校長に聞いた。

「学び合い」がもたらす「学び」とは？

——まず、「学び合い」をどのように捉えているのかをお聞かせください。

鈴木 これまで「授業で勝負をする」という思いで学校経営に取り組んできました。子どもたちの思考力を育む授業づくりを考える上で、「学び合いの充実」はまさに中心テーマではないでしょうか。

嶋野 そうですね。子どもは何のために学校で学ぶのか。それを突き詰めて考えると、「学び合い」に行き着きます。子どもたちが個別に学習しているだけなら、学校に来て共に学ぶ意味はありません。異なる経験や考えを持

つ者同士が集団で多様な考えを交わし合い、一人ひとりの考えやみんなの考えを深められることが、学校で学ぶ本質的な意味だと考えます。2008年に出された中央教育審議会答申にも、思考力・判断力・表現力等を育むために不可欠なものとして、「互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる」活動が挙げられています。

鈴木 勤務校の地域の小・中学校では、学び合いに相当する学習活動を「練り合い」と呼んでいます。「共同追究」「関わり合い学習」などの言葉も聞いたことがあります。

文教大大学院教育学研究科

嶋野道弘 教授

しまの・みちひろ◎埼玉県公立小学校教諭、文部科学省初等中等教育局主任視学官などを経て、現職。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会生活・総合的な学習の時間専門部会委員。著書に『これからの生活・総合―知識基盤社会における能力の育成と求められる教師力』（共編著、東洋館出版社）など。



静岡県掛川市立城北小学校

鈴木功一 校長

すずき・こういち◎掛川市公立小学校教諭、静岡県教育委員会義務教育課総務企画班指導主事などを経て、現職。掛川市立城北小学校◎「自まん」持て自分友達城北小」を教育目標として、自己肯定感やチャレンジ精神の育成を重視した学校経営に取り組み。児童数は617人。

思考が深まる「学び合い」——「そうか、なるほど!」のある授業づくり

図1 5年生の算数の学習感想

「多角形の内角の和」を学んで

私は、五角形に対角線を1本引いて、三角形と四角形に分けて考えましたが、友だちの考えを聞いて、どんな多角形でも三角形に分ければ内角の和が求められるので、いつでも分かるやり方だと気付きました。今日は、内角の和の新しい決まりを発見できて、うれしかったです。算数はこういう決まりがあるのでおもしろいです。

*嶋野教授の資料より。下線は編集部加筆

嶋野 他にも「協同（共同、協働）学習」のように、学び合いと似た意味で使われる言葉は多くありますが、「考えの違う者が集まり、考えを出し合いながら深める」という点は共通です。学び合いは「自己との対話を重ねつつ、他者と相互にかかわりながら、自分の考えや集団の考えを発展させて、共に実践に参加していくこと」と整理できるでしょう。

——学び合いのある授業では、どのような子どもの姿が見られるのでしょうか。

嶋野 例えば、多角形の内角の和について学んだ5年生の感想を見てください（図1）。この子どもは、友だちの考えを聞いて、自分の考えよりも合理的な方法があることに気付きました。この学びが、単なる情報交換ではなく、自分と友だちの考えを相互に関係付け、より質の高い考えへと再構築していることに注目してください（図1下線部分）。「学び合

い」というと、「他者とのかわり」に着目しがちですが、「三角形と四角形に分けて考えましたが、友だちの考えを聞いて」のように、まず「自分の考えを持ち、自分を見つめる」ことから始まります。それが「自己との対話」の意味です。他者とかかわることによって、自分の考えを吟味し、友だちの考えを取り入れることで、一人では解決できない問題への新たな見方が生まれます。また、「うれしかった」「おもしろい」という言葉から、情緒が動いていることも分かります。他者とのかわりにより情緒が伴うことで、獲得した学びは心に残るのです。

鈴木 このような学び合いでは、子どもは思わず立ち上がって、自分の考えを主張するほど夢中になります。どの子どもも充実した表情をするものです。

嶋野 友だちとのかわりによって考え方や見方が広がる時、子どもは「分かって良かった」といううれしさと共に「自分が変わった」といった自己変革を認識し、学びの実感や充実感を深めます。これは、学習感想などに必ず表れます。その気持ち子どもを次の学習へと駆り立てるのです。

鈴木 学び合いの結果、「次はこれを考えたい、学びたい」といった気持ちが広がることによくあります。私は、最後の2文字の「たい」を取って「タイの養殖」と呼んでいます。「問題解決」という言葉に縛られすぎ

ると、何かを解決して終わらせるべきだと考えがちですが、「たい」という次の時間に開かれた終わり方にすれば、学びが連続します。**嶋野** 授業後も、子どもたちの間で議論が続いているような学びが理想ですね。

鈴木 学び合いがもたらす学びは、しばしば教師の想像を超えます。私の学級担任時代の実践から、3年生国語のある授業を紹介しましょう（P.6図2）。「がちゃん」「がったん」「かたこと」など貨物列車の出す音だけで書かれた「かもつれっしゃ」という詩を読む授業です。この詩を通じて詩の特徴や面白さを味わってほしいと考えていましたが、ある子どもの「音が書かれているだけだから、詩ではないと思う」という思いもよらぬ発言から、授業は予想外の方向に展開しました。他の子どもがこの発言に反応し、夢中になって賛成や反対の考えを述べ始めたのです。その姿に、私は「これは面白い学び合いになる」と感じ、次の時間は「かもつれっしゃ」は音だけだから詩ではないか」を学習問題として話し合うことにしました。

「詩は音だけじゃなくて、説明してる言葉がある（だから詩ではない）」「私は詩でいいと思う。詩というのは作文と違って言葉が短い。この詩も音だけで短い」など、子どもたちは知識を総動員して考えを述べ、議論は白熱しました。学び合いの流れを決定付けたのは、ある女の子の「音しかないけれど、様子

3年花組『かもつれっしゃ』

授業者 鈴木功一先生

教材：「がちゃん」「がったん」「かたこと」など、貨物列車の出す擬音だけで構成された五連の詩
ねらい：詩の特徴に子どもたちが絡んで追求する中で、この詩の面白さ、よさに迫ってほしい

最初に「かもつれっしゃ」の詩をノートに写す。擬音の多さに戸惑いながらなんとか写し終わる。ある男の子のつぶやきが先生の耳にとまる。

福本「ぼくね、ちょっとおかしいと思ったんだけどね。これって『詩』って言ったでしょ。だけど、『詩』じゃないと思う」

T「どうして？」

福本「だってね。かもつれっしゃってね、言ってもね、音が書いてあるだけだから……」

この発言をきっかけに子どもたちの目が輝き出し、賛成・反対の発言が続く。

西川「そう、そう、こりゃあおかしいよ。ただ音だけ。詩じゃないよ先生」

三井「私は詩でいいと思う。わけはうまく言えないけど詩でいい」

渡辺「だってさ、本に詩って書いてあるんだから詩」

西川「いくら書いてあったっておかしいのはおかしい。音だけなんて詩じゃない」

T「（ここだ！）と思い」「よし、『かもつれっしゃは音だけだから詩じゃないか』を学習問題にして、けんが学習をしようか？」

C「やろう。ぼく、おかしい方。……」

個人学習の時間を取り、机間指導に入る。「詩じゃない」という子どもにはその根拠をみんなに訴えられるよう話し掛ける。「詩だ」という子どもには「反対派はどう言ったら分かってくれるかね……」と話し込む。

◎次の時間

詩であるかどうかの根拠の発表から学び合いが始まる。

小谷「（中略）音がたくさん出てくるだけで詩なら、みんな詩になっちゃう」

久本「ぼくのうちにね、少年少女の詩集というのがあるんだけどね。詩にはね、音だけじゃなくて、説明してる言葉がある」

T「例えばどういうこと？」

久本「あのね、『ひまわりは太陽だ……』って言うように説明してる。音だけじゃ分からない」

川崎「私は詩でいい。詩というのは作文と違って言葉が短いんだよね。このかもつれっしゃも音だけで短いから詩でいい」

結城「反対。ただ短い言葉なら詩というのはおかしい。（中略）」

他にも、数人の子どもが考えを主張。ある女の子の次の発言に多くの子どもが反応する。

藤本「私はね、詩でいいと思ってた。そのわけが、さっき久本さんが言ったことで浮かんだんだけどね。イーダ（舌を出す）。久本さんは、『音だけじゃ分かんない』って言ったでしょ。ということは、分ければ詩と言ってもいいということですよ。私はね、音だけだけど、様子が浮かんできて分かるからね、詩でいいと思う」

岸川「賛成、私も音だけでも浮かんできたから詩でいいと思う（中略）」

西川「だったらさあ、どんなことが浮かんだのか説明してほしい。ぼくには浮かばない」

T「じゃあ、詩だと言う人は、この『かもつれっしゃ』の様子が浮かぶ

と言うんだね。それを話してみてよ」

音の表す情景を子どもたちが発言。友だちの発言により新たな気付きが生まれ、理解が深まっていく。最初に「詩ではない」と主張していた福本くんや西川くんの詩に対するイメージは明らかに変わり、情景をしっかりと理解していく。

千葉「ぼくは、（中略）一連の音はかもつれっしゃがとまる時にぶつかって音だと思う」

樋口「ちょっと違う。ここはね、かもつれっしゃが動き出したところ。かもつれっしゃって（中略）動く時、がちゃんがちゃんって音がする。だから動き始め」

宇野「同じここで、私もその『ん』のごとなんだけど、『ん』がつくとね、ゆっくりな感じがするんだよ。三連の『ごっと』より『ごっとん』の方がなんかゆっくり動き出したって感じがする。樋口さんのでいい」

羽田「みんなのを聞いていて思ったんだけど、三連を見てください。『ごっと』『がた』を繰り返していたけど、最後は『ごと』『がた』になってるからね。スピードがついてきた気がする」

深田「それなら、四連の終わりもそう。『がた』『ごと』が『かた』『ごと』になってるでしょ。もっと速くなった」

西川「ちょっと言いたい。少しはね、みんなの言うことが分かってきたけど、でも……深田さんに言いたい。『がた』『ごと』が『かた』『ごと』になっていくのは、スピードが出たんじゃないで、遠くへ行っても音が小さくなったんじゃないんですか」

結城「まあ、スピードが出て遠くになったんだから、深田さんと西川くんのを合わせたっていいと思う」

平井「つけたし。その最後がね、ことことこと……ってなってるでしょ。『かた』っていう音は聞こえなくなっちゃって一つになっちゃったでしょ。やっぱ、遠くへ行ってしまったと思う。遠くになっていくから一つの音になっちゃうんだと思う」

樋口「だからさ、この『かもつれっしゃ』を読む時はね、最後のところはね、ただ早口じゃなくて小さい声で読めばいいと思う。そうすれば、様子が分からない人にも分かると思う」

T「じゃあ読んでみてよ」

樋口くんが読む。声の大小、スピードの変化あり。

T「詩だという人が様子を話してくれたけど、どうだった？ 西川くんや、福本くん」

この問い掛けに、最初に「詩ではない」と主張して話し合いのきっかけをつくった子どもが次のように発言し、授業は終了した。

西川「深田さんとは意見が違ったけど、ぼくにも浮かんできた。詩でもいい」

福本「ぼくは、みんなが、うそつきってわけじゃなくて、音なのにいろいろ浮かんできたのを聞いて、そうかなっていうか、すごいみたいな……気がしました」

思考が深まる「学び合い」——「そうか、なるほど!」のある授業づくり

学び合いの現状と課題

——学び合いの現状と課題についてお聞かせください。

嶋野 多くの先生方が、授業に子ども同士の話し合い活動などを積極的に取り入れている一方で、授業づくりには難しさもあるようです(図3、4)。

鈴木 学び合いの大切さは、多くの教師が感じています。ただし、実際の授業では、例えば、話し合う内容が不明確なまま何となく

が思い浮かぶから詩でいいと思う」という趣旨の発言でした。この発言が多くの子どもの心を捉えたのです。そこで、「どういう様子が浮かぶか」を問いかけると、子どもたちは次々と具体的な情景を口にし始めました。
最初は「詩ではない」と主張していた子どもが、友だちの考えを聞くうちに、音だけでも情景が浮かんでくるためにこれは詩でもいいと考えを変えています。皆が夢中になって参加したからこそ、このような学び合いに発展し、全員が詩を味わえたのだと思います。忘れられない授業の一つです。

つけ合い、自分や集団の考えを発展させながら、「詩とは何か」という概念を形成しています。そして、情景を思い浮かべようと一生懸命に読むことで詩を文化的に味わうことが出来ています。まさに、思考力・判断力・表現力を育む授業だと思えます。
教育の目的の一つは文化遺産の伝承ですが、教師は文化の結果としての知識を教えることに終始してしまいがちです。しかし、授業には本来、実践を通して、皆で文化を味わい、吟味し、理解することが求められています。今後の社会で求められるのも、まさに物を事や吟味し、多くの人と考えを交わしながら、より良い考えをつくっていく力です。だからこそ、このような力を育む学び合いは必要なのです。

ループ活動に移ったり、個々の考えを発表する、「吐き出す」だけで終わってしまったりするものがよくあります。どのように学び合いを深めるのか、教師が授業の構想を子どもの具体的な言動で描けていないことが要因だと思えます。子どもが「学びたい」「解決したい」と思える問題になっていないこともあります。

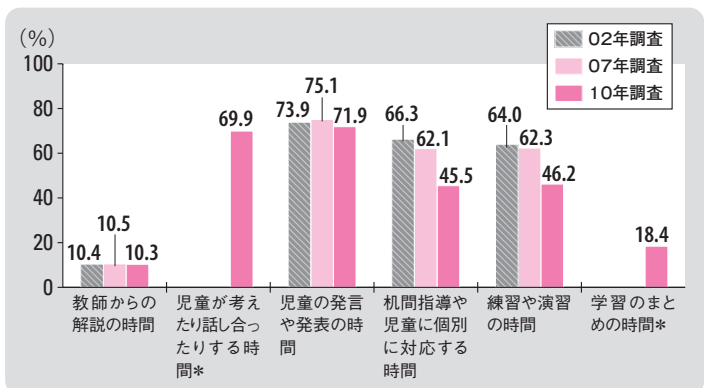
嶋野 学び合いとは、自己の考えを持ち、他

図4 「学び合い」で難しさを感じること

- ▶「どういう状態であれば『学び合い』と言えるのか。また、どのように作り出すのか」
- ▶「イメージの共有が難しい。分かった子どもが分からない子どもに教えることを含め、安易なペア学習や、グループ学習が組まれてしまいがち」
- ▶「子ども同士の意見交換が、更に新たな学びを生むように持っていくこと」
- ▶「子ども自身が学び合う必要性、大切さ、楽しさ、喜び、充実感を味わえる授業づくり」
- ▶「(学び合いの前提として)受け身的な子どもが、自分の考えを持つための指導が難しい」
- ▶「集団の中での組織化に焦点を当てがち。学び合いの結果、一人ひとりの学びが深まった様子に注目すべき」

出典 / VIEW21 小学版 読者モニター(小学校教師)アンケートの自由記述。調査時期は2011年5月

図3 小学校教師が心がけている授業時間の使い方・進め方



注1 「多くするように特に心がけている」の% 注2 *は2010年調査より新たに追加した項目
出典 / Benesse 教育研究開発センター「第5回 学習指導基本調査」 調査時期は2010年8~9月。10年調査の対象は、公立小学校の教師(学級担任のみ) 2,688人

学び合いのある授業づくりのポイント

者と共に考えを発展させていくものであることを、本来の意味で理解し、思考力・判断力・表現力等を育む上での学び合いの必要性を切実に感じている先生は、意外と少ないのかも

しれません。本質を理解しないまま、形だけを踏襲してグループ活動などを取り入れても、中身が伴わず学び合いが形骸化してしまおうでしょう。

——学び合いのある授業をつくるには、どのような点に留意すればよいでしょうか。

鈴木 まず、子どもが知らず知らずのうちに本気で考えたいような学習問題を提示する必要があります。経験から言うと、子どもが夢中になる問題は「一番…なのはどれか」のように、自分の意思で選択・決定が出来るものだと思います。自身を絡めていけるものです。

嶋野 そうですね。特に、二者択一よりも、三つ以上の答えの中から考えて選ぶ問題が望ましいでしょう。迷う中で多様な考えが出てきやすいからです。先ほどの「詩であるかどうか」の議論は、一見すると二者択一ですが、子どもの関心は「根拠」にあったため、学び合いが深まったのだと思います。

鈴木 自分の考えを持たせるために個人学習を充実させることも、学び合いには欠かせません。普段から机間指導やノート指導を大切にして「個」を耕しておくことが、質の高い学習集団の土台になると考えています。

嶋野 私も「個人を育てること」が何より大切だと思います。まず自分の考えがなければ、他者と考えを深め合うことは出来ません。

鈴木 「個」を育てる上では「不ぞろいに磨こう」と、先生方に話しています。学び合いの前に子どもの考え方を画一化しようとせず、学び合いに備えて、それぞれの得意を大切にしながら各自の考えを明確にしておくという意味です。

学力差などの個人差が大きいと、学び合いを成立させるのが難しいという声を聞きますが、私は逆だと思っています。水力発電では水の落差が大きいのほど発電効果が高まるのと同じように、学び合いは子どもたちの資質や発想が異なるほど充実すると思います。例えば、「かもつれっしゃ」の詩で議論の出発点となった「これは詩ではないと思う」という素朴な疑問は、ゆったりペースだけれど、核心をつく問いを発する子どもから出たものでした。他にも例え話が上手、数字に強い、図で考えるのが得意——など、一つの学級に多様な個



性が存在します。もちろん明らかな間違いは正しますし、正しい知識・技能を身に付けることは大切ですが、思考力を伸ばすという面では、多様な考え方が必要です。

嶋野 同感です。どんな場面でもあらかじめ用意された正解を求めさえすればよしとする発想からの脱却が必要です。例えば今後、外国籍の子どもが増えるなど、個性の多様化が進むと思われます。そのような社会では、新たな考え方を構築する力が、求められます。

個を持ち、自分を開くと共に、相手を尊重し、自分や相手と率直に向き合える態度や学

思考が深まる「学び合い」 —「そうか、なるほど!」のある授業づくり

級の雰囲気をつくることも大切です。そのために、普段から先生が子どもを認めて自信を付けること、そして子どもが自分自身を遠慮なく表現できる学級をつくることを心掛けてください。その上で、発表の仕方や聴く力など、技術を身に付けるとよいでしょう。城北小学校で取り組まれている『自まん』づくり運動はまさに学級づくりに当たります(P.11参照)。「こんなことを言ったら笑われるのではないか」とびくびくしたり、発表するのが恥ずかしいと感じたりする学級では、子どもは通り一遍の考えしか述べず、学び合いは深まりません。

鈴木 「分からなかったけど、みんなの考えを聞いて分かった」という子どもの学習感想に、「それは素晴らしい」とコメントした担任がいました。教師が深い理解を示すことも学び合いの素地の一つです。

—— 学び合いの素地をつくった上で、先生が授業で心掛けるべきことは何でしょうか。

嶋野 「個」と「集団」の有機的なかかわりをつくることです。例えば、いろいろな考えが出てきた時、「2人の考えは違うようだけど同じだね」「2つの考えを合わせると、○さんの考えになるね」などと板書を活用して整理したり関連付けたりすることで、学び合いが可視化され、思考が明確になっていきます。思考は言語で認識されるため、言語活動を適切に入れることで思考を明確にするこ

図5 子どもの資質・能力が「動き」、「力」が生まれる時の姿

子どもが「動く」時	子どもが「動く」姿
<p>考え込む</p> <ul style="list-style-type: none"> 口を閉ざす 遠くを見るような表情をする 口をもぐもぐしてつぶやく 	<ul style="list-style-type: none"> 目を閉じる とんとんと頭をたたく 怒ったような顔 「ちょっと待ってよ、先生」
<p>思い付く</p> <ul style="list-style-type: none"> ぱっと明るい表情 「あっわかった」「あっそうだ」 にっこりして挙手 急に行動を開始する 	<ul style="list-style-type: none"> 周りの子に話し掛ける 急いでノートにメモ 声の大きな「はい」 あてられないと残念な表情

*鈴木校長が子どもの観察を基に作成した資料より抜粋。他の姿も含んだ全資料を、小誌ウェブサイトでご覧いただけます。
<http://benesse.jp/berd/> >情報誌ライブラリ (小学校向け)

とも大切です。意見交換の後に自分の考えを文章でまとめる学習などが効果的でしょう。また、子どもがなかなか問題点に気付かなかったり、話し合いが堂々巡りしたりしている場面での方向付けも、教師の重要な役割です。その際、教師が一方的に「こう考えなさい」と指示すると、子どもの主体性が失われます。あくまでも子どもの考えを土台にして「それだったら、こうしたら?」「これとこれを比較するとどうなる?」などと、新たな視点や思考の道筋を示すとよいでしょう。教師の適切な「出場と塩梅」です。

鈴木 教師が「出る」適切な場面を判断する方法は、子どもの様子をよく観察することに

尽きると思います。子どもに力が付いていく様子にはいろいろな姿があります。例えば、「考え込む」時の様子一つでも、実に多彩な動きを見せます(図5)。

嶋野 これも面白い資料ですね。学びの姿は一律ではありません。個性の話とも重なりますが、考え方、学び方をそろえるという発想は崩す必要があります。「学び合い」は昔から言われ、実践されてきたことですが、それゆえに表層的になる恐れがあります。教育の質の転換が求められる今こそ、校長先生には「そもそも学び合いとは何か」を先生方と共に一度考えていただきたいと思います。

—— 本日はありがとうございました。

学び合いのある授業づくりのポイント

学び合いの前提として

- 子どもが本気で考えたい学習問題を設定する
- 個を育てる、個人学習を充実させる
- 学び合いの素地をつくる (自分を遠慮なく出せる学級をつくる、発表力を付けるなど)

学び合いを活性化させるために

- 個の考えを整理し、関連付ける
- 言語活動を適切に取り入れる
- 教師が適切な場面で「出る」